令和４年度(2022 年度)全国学力・学習状況調査の結果について

塩尻市教育委員会

１　趣　旨

本年 4 月 19 日(火)に実施した「令和４年度全国学力・学習状況調査」について、国及び県の調査結果の公表があり、これに基づき、本市の結果を分析しましたので、その概要をお知らせするものです。

２　調査の概要

(1) 調査の目的（文部科学省）

全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年と実施した学校数・児童生徒（小中学生）の人数

対象学年	対象学校数	学校数（実施率）	実施人数
小学校第６学年 (楢川小中学校前期課程を含む)	9	９（１００％）	４５０人
中学校第３学年 (両小野中学校及び楢川小中学校後期課程を含む)	6	６（１００％）	５５８人

(3) 調査の事項及び手法

ア　児童生徒に対する調査

① 教科に関する調査(知識と活用を一体的に問う問題、記述式の問題を一定割合で導入)

小学校調査は、国語、算数及び理科、中学校調査は、国語、数学及び理科に関する問題

② 質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査

イ　学校に関する質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況等に関する質問紙調査

３　児童生徒に対する調査結果

(1)　教科に関する調査結果の全体概要

ア　小学校第６学年は、国語、算数、理科それぞれにおいて、全国及び県平均正答率を上回る結果でした。

イ　中学校第３学年は、国語、数学、理科それぞれにおいて、全国及び県平均正答率を上回る結果でした。

(2)　各教科の調査結果と今後の対応

ア　小学校（国語）

日常行われている授業により、「読むこと」「書くこと」の力が全体的についてきています。「話すこと・聞くこと」の言葉の特徴や使い方に関することをさらに伸ばすために、対話的な学習場面や子どもの生活に即した場面をより取り入れていくことが望まれます。

イ　小学校（算数）

すべての領域で全国平均を上回っています。言葉で答える機会を大切にするとともに、書いて答えることに抵抗感がなくなるようにしながら、「知識・技能」「思考・判断・表現」の両方の力をバランスよくつけていくことが望まれます。

ウ　小学校（理科）

実験や学習の積み重ねを通して、実験で得た結果を分析して解釈し、自分の考えをもつ力が身についてきています。日常生活と関わらせながら主体的な問題解決を通して、知識を習得し、その知識を次の学習や生活に生かしていくことを目指していきたいです。

エ　中学校（国語）

課題解決に向けた授業の積み重ねにより、全体的に国語の力がついてきています。資料を活用して自分の考えを伝える文章を書いたり、考えが伝わるように表現を工夫して話したりする力がついてきています。日々の授業で着実に「知識・理解」の力もつけていきたいです。

オ 中学校（数学）

「知識・技能」「思考・判断・表現」の力がバランスよくついてきています。記述式問題は短答式問題より正答率が低い傾向があります。自分の考えを持ち、タブレットなども活用して、言葉や数式を用いて友だちに考えを伝え、グループや全体での追究を通して深めていくことが望まれます。

カ 中学校（理科）

すべての領域で力をつけてきており、記述式問題の正答率も全国を上回っています。実験や観察の目的や方法について考え、自分の考えを言葉や文章にして伝えながら、協働で探究していく学習が望まれます。学んだことを日常の生活に戻して理解を深めることも大切にしていきたいです。

(3)　児童生徒質問紙調査結果から

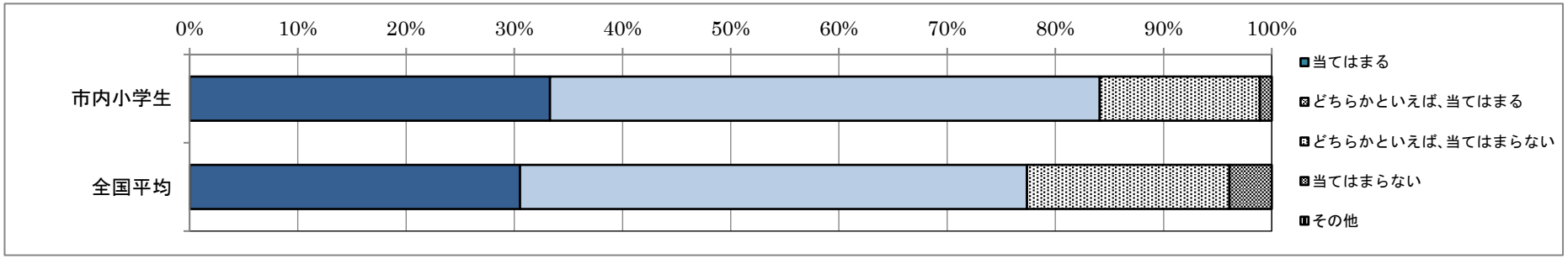
ア　生活に関する観点から

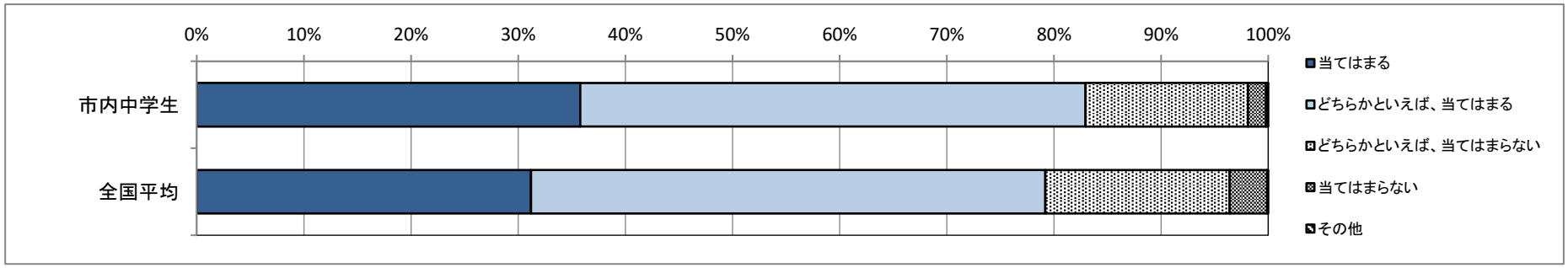
塩尻市の市民運動「早ね 早おき 朝ごはん・どくしょ」を踏まえて調査結果をみると、「朝ごはんを食べている」については、「している」「どちらかといえば、している」は小学生と中学生ともに９割以上です。「就寝時刻」については８割以上、「起床時刻」については、９割以上の児童生徒がだいたい決まった時間に寝起きしており、規則正しい生活習慣が定着しています。

平日の読書時間を、「一日３０分以上」で見ると、小学生４０％（全国３６％)、中学生３４％（全国２７％）であり、全国に比べ高くなっています。また「読書は好きですか」の質問については、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が小学生８１％（全国７３％）中学生７９％(全国６８％)と全国に比べ高く、読書好きの児童生徒が多いことが分かります。

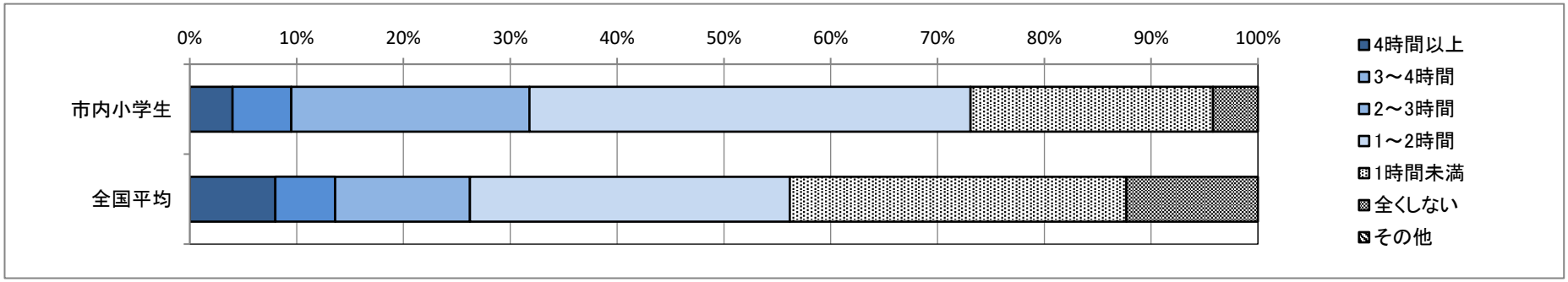
イ　学習に関する観点から

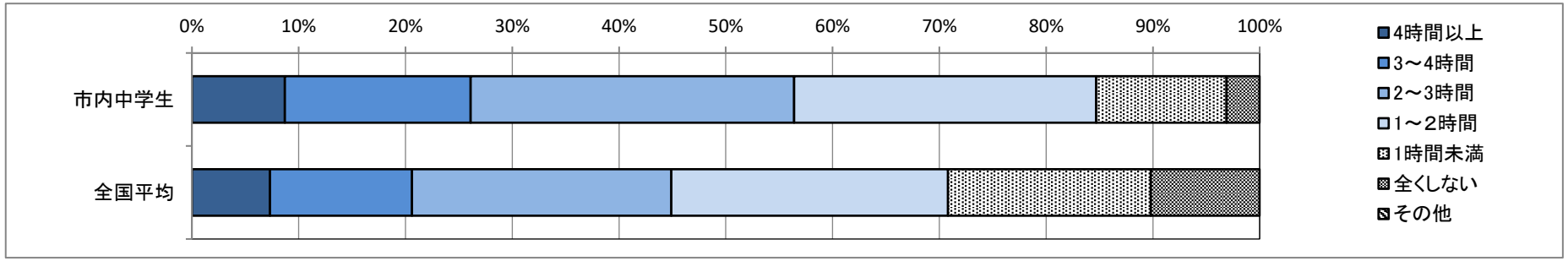
①　【授業では課題解決に向けて、自分で考え自分から取り組んでいますか】質問番号(39)





②【土日・休日の家庭での学習時間】質問番号(22)



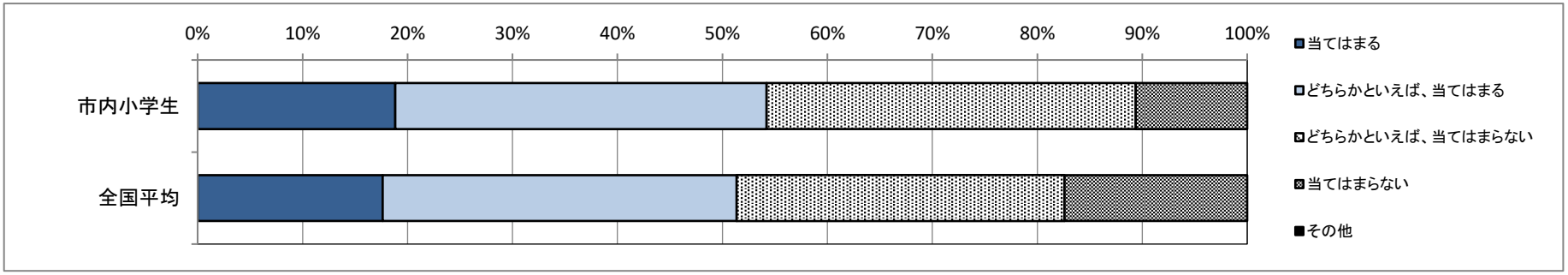


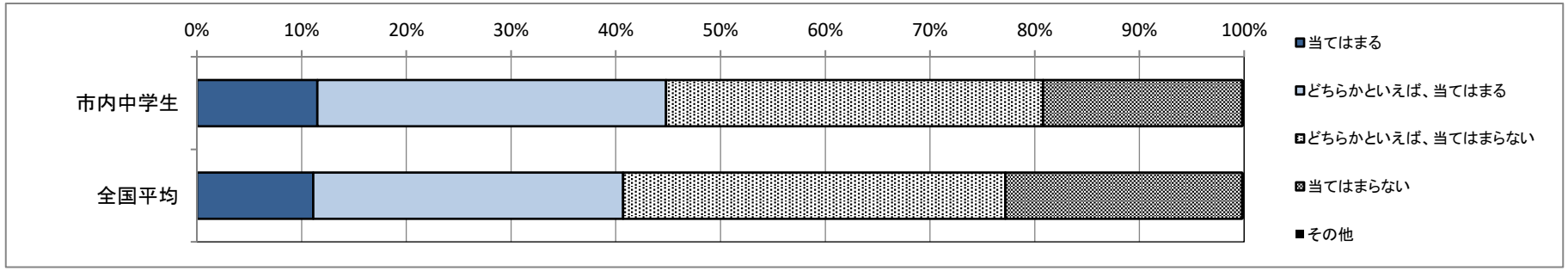
授業の課題に対する主体的な取組については、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が、小学生８４％（全国７７％）、中学生８３％（全国７９％）でした。小中学校ともに全国に比べて高く、教師から示される課題や、自分たちで立てた課題に対して、自分から考えて取り組む主体的な姿勢の児童生徒が多いことが分かります。

また、平日の家庭学習の時間は、小中学校ともに１時間から２時間が最も多く、平日の家庭学習１時間以上の児童生徒は、小学生７１％（全国５９％）、中学生７３％（全国７０％）でした。土日・休日の家庭学習の時間は、小学生は１時間から２時間、中学生は２時間から３時間が最も多く、土日・休日の家庭学習１時間以上の児童生徒は、小学生７３％（全国５６％）、中学生８５％（全国７１％）で、全国より高くなりました。土日・休日にも頑張って学習している本市の児童生徒の実態が見えてきました。家庭にも協力いただきながら、タブレット等も効果的に利活用して、これからも家庭学習の充実に向け取り組んでいきます。

ウ　地域や社会との関わりの観点から

【地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか】質問番号（30）

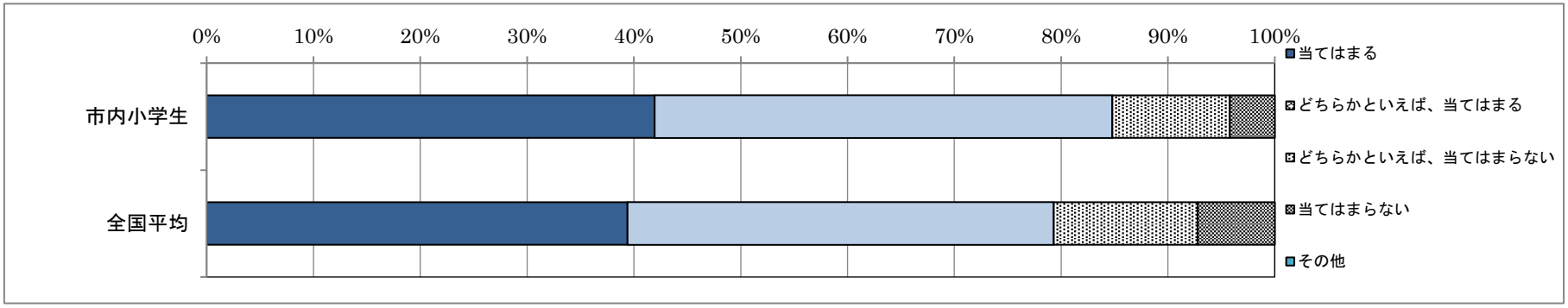


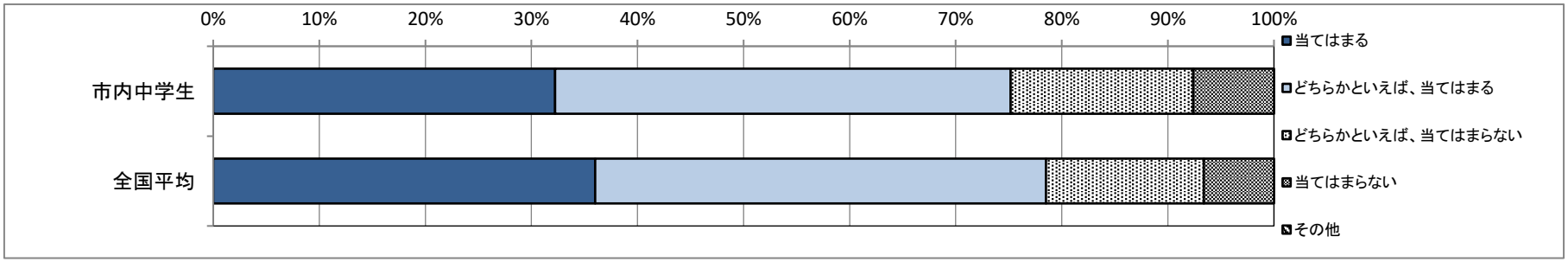


「地域や社会をよくするために何をすべきかを考えることがありますか」の質問については「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と答えた児童生徒は、小学生５４％（全国５１％）、中学生４５％(全国４１％)でした。「地域の行事に参加していますか」の質問については「当てはまる」でみると、小学生５３％（全国２３％）、中学生２９％（全国１４％）と全国の２倍以上の結果になりました。前年度（令和２年度）より地域の行事も復活し、地域や社会への関心を持ちながら、積極的に参加している児童生徒の様子が伺えます。

エ　自分自身についての観点から

【自分にはよいところがありますか】質問番号（７）





自分にはよいところがありますかの質問については、「当てはまる」「どちらかというと当てはまる」と答えた児童生徒の割合は、小学校８５％（全国７９％）、中学校７５％（全国７９％）で、多くの児童生徒が自己肯定感を高めながら、前向きに生活をしていることが伺えます。しかし、中学生になると「当てはまらない」「どちらかというと当てはまらない」と回答する生徒が増えています。キャリア教育などを更に充実させるとともに、良さを認め合い伝え合うことを学校、家庭、地域で大切にしていきたいと思います。

４　学校に関する質問紙調査結果から

(1)　教科指導

☆数値（%）は、「よく行った」「どちらかといえば行った」「あまり行わなかった」「全く行わなかった」の中で「よく行った」「どちらかといえば行った」の合計の割合

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号（30）〉 習得・活用及び探究の学習過程を見通した指導方法の改善及び工夫をしましたか	１００％	１００％
	全国平均 ８８．０％	全国平均 ８８．２％

ア　本市の小中学校では児童生徒が課題をもって取り組む授業が行われています。児童生徒への質問紙でも「授業では、課題解決に向けて、自分で考え取り組むことができていますか」の質問に「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」の合計が、小中学校ともに８０％を越えています。

　また、上の結果からも市内すべての小中学校で、学習過程を見通した指導方法の改善や工夫を行っていることが伺えます。これからも児童生徒の資質・能力を高めるために、学びのプロセスを大切にした日々の授業改善に取り組んでいきます。

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号（小 68）（中 66)〉 学校の教員は特別支援教育について理解し、児童生徒の特性に応じた指導上の工夫(板書や説明の仕方、教材の工夫など)を行いましたか	１００％	１００％
	全国平均 ９４．３％	全国平均 ９２．８％

イ　児童生徒の特性に応じた指導上の工夫を、市内すべての小中学校で行っていることが伺えます。個別の指導計画をもとに、より適切な支援を行っていくことが求められています。また、学校におけるユニバーサルデザイン化も更に進めていきます。これからもすべての教員が研修を重ねて特別支援教育について理解を深め、個に応じた適切な支援を行っていきます。

(2) 教育課程の編成

☆数値（%）は、「よくしている」「どちらかといえばしている」「あまりしていない」「全くしていない」の中で「よくしている」の割合

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号(16)〉 指導計画の作成に当たっては、各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校の教育目標を踏まえた横断的な視点で、その目標の達成に必要な教育の内容を組織的に配列していますか。	２２．２％	４０．０％
	全国平均 ２７．９％	全国平均 ２５．９％

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号（18)〉 指導計画作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせていますか	４４．４％	４０．０％
	全国平均 ３２．０％	全国平均 ２２．９％

指導計画の作成に当たっては、中学校では各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、横断的な視点で教育目標達成に必要な内容を組織的に配列している学校の割合が、全国平均より高い結果になりました。また、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を効果的に組み合わせている学校の割合は小中学校ともに４割を超え、全国平均を上回りました。

(3) 地域との連携

☆数値（%）は、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかというとそう思わない」「そう思わない」「取組を行わなかった」の中で「そう思う」の割合

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号（小 76）（中 74）〉 保護者や地域の人との協働による取組は学校の教育水準の向上に効果がありましたか	６６．７％	６０．０％
	全国平均 ４１．６％	全国平均 ２９.８％

コロナ禍の中でも、コミュニティ・スクールの仕組みを生かした、保護者や地域の人との協働による活動が復活し、全国と比べてもよく行われるようになりました。それにともない保護者や地域の人との協働による取組が、学校の教育水準の向上に大きな効果をもたらしています。

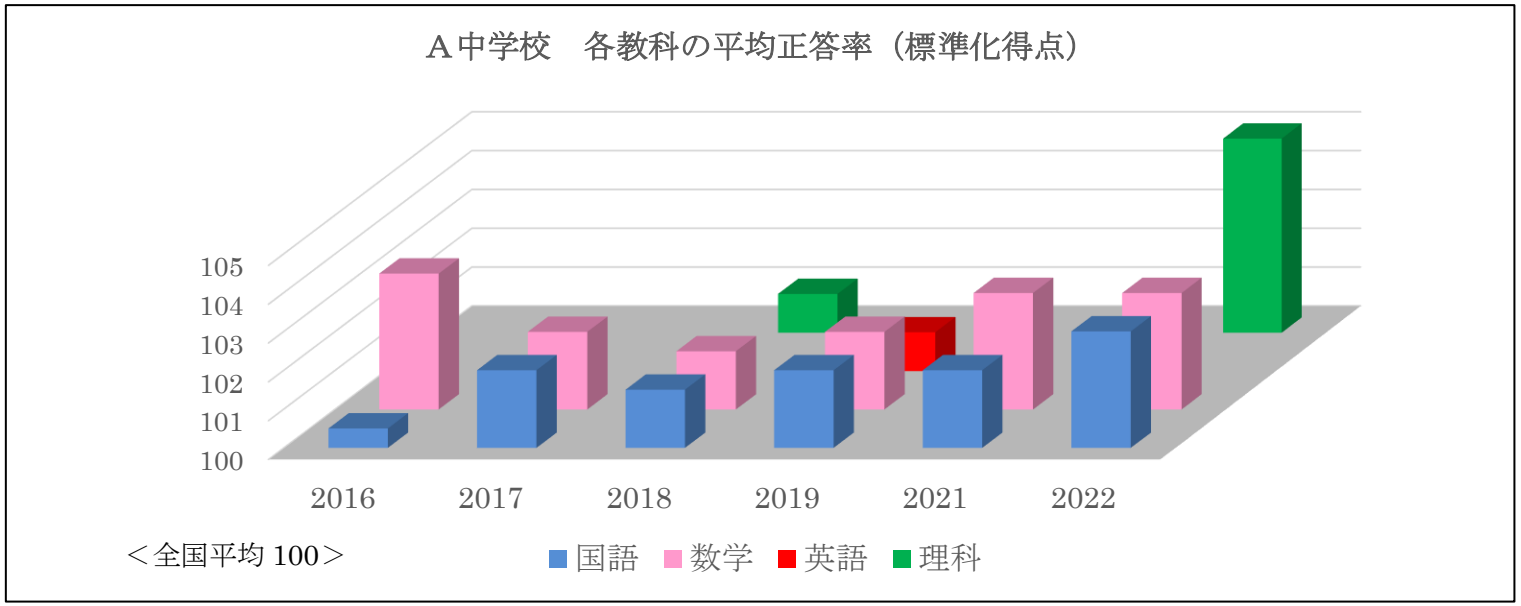
(4) タブレットなどの ICT 機器の活用

☆数値（%）は、「ほぼ毎日」「週３回以上」「週１回以上」「月１回以上」「月１回未満」の中で、「ほぼ毎日」の割合

項　　目	小学校	中学校
〈学校質問番号（小 59）（中 57）〉 前年度までに一人一人に配備された PC・タブレットなどの ICT 機器を、授業でどの程度活用しましたか	４４．４％	８０．０％
	全国平均 ５８．２％	全国平均 ５５．５％

本市でも一人一人にタブレットが配備され、ICT 機器の利活用が進んでいますが、昨年度はタブレットなどを「ほぼ毎日」活用するところまでには至りませんでした。児童生徒質問紙の「前年度までに受けた授業で PC・タブレットなどの ICT 機器をどの程度使用しましたか」という質問で「ほぼ毎日」と回答した児童生徒の割合は小学生１９．９％、中学生６．７％でした。学級や教科による差もあり、学校の捉えと児童生徒の意識に大きな差が見られました。授業やコミュニケーションの場面で効果的にタブレットなどを利活用していくことが強く望まれます。

５　学力向上に向けたＡ中学校の取組



【 2020 年　　コロナのため未実施　国語, 数学 2016 年～2022 年実施　英語 2019 年実施　理科 2018 年、2022 年実施 】

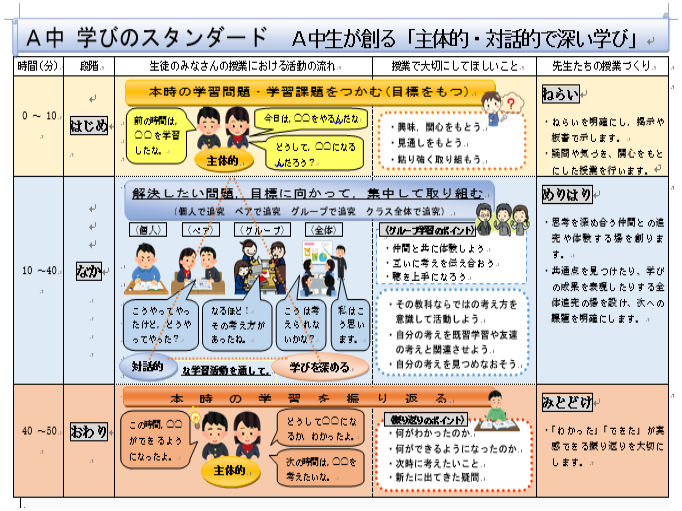
Ａ中学校の全国学力・学習状況調査の各教科の平均正答率は上のグラフ（標準化得点）のように、毎年全国平均を上回っており安定した力をつけてきています。この中学校は、どのような取組で成果を上げているのでしょうか。

(1) Ａ中学校　生徒と先生で創り出す授業

Ａ中学校では、2016 年度より「授業は生徒と先生で創り出すもの」「〇〇先生の授業でなく、Ａ中としての各教科の授業」という考えのもと、日々の授業に取り組んできました。生徒の学びのプロセスに沿った「Ａ中　学びのスタンダード」を授業づくりの指針として作成し、全教科で生徒と先生による授業づくりに取り組んでいます。「学びのスタンダード」は、授業のはじめの段階では「学習問題・学習課題をつかみ、目標をもつ」ことを、なかの段階では個人、ペア、グループ、全体などの追究の仕方を示し、「解決したい問題や目標に向かって、集中して取り組む」ことを、おわりの段階ではポイントに沿って「学習を振り返る」ことを大事にしています。また、学びの主体である生徒たちの視点に立った授業づくりに取り組みながら「学びのスタンダード」を生徒たちのものにしていくことを大切にしています。各教科の特性を踏まえながら、主体的・対話的で深い学びに向けて日々全校で取り組んでいます。

(2) 社会的自立に向けた多様な生徒への支援

Ａ中学校では多様な生徒に対する支援を保護者や関係機関などと連携しながら行っています。個別の指導計画を作成し、支援会議などを通して、職員同士で生徒の支援 の方向を共有し、チームによる支援を行っています。学校には集団生活にうまく適応できない生徒、身体にハンディがある生徒、学習理解がゆっくりな生徒など多様な生徒が学んでいます。それぞれの生徒の良さや可能性の芽を大切にしながら、課題を丁寧に把握し、個に応じた支援を行っています。特別支援教育においては、インクルーシブ教育や授業のユニバーサルデザイン化に力を入れて取り組んでいます。特別支援教育コーディネーターや特別支援学級担任を核にして、授業はもちろんですが、部活動や生徒会などの場面でも、教職員が情報を共有して、個に応じた支援を心がけています。また、全校で不登校対応に力を入れて取り組んでいます。教室での授業や学活に参加できない生徒に対しても、オンラインでの授業の配信や担任による懇談などを積極的に行っています。将来の社会的な自立に向けて、多様な学びの機会を設けながら、丁寧に個々の生徒に向き合い対応しています。



［Ａ中　学びのスタンダード］

(3) 生徒による授業評価と授業改善

Ａ中学校では年に２回、生徒による各教科の授業評価を行っています。「何を学習するか示されている」「一人でじっくり取り組んだり、友だちと考え合ったりする時間がある」「振り返りやまとめの時間がある」などの「学びのスタンダード」に沿った項目に、「先生の説明や教え方は理解しやすい」「板書は見やすく分かりやすい」など先生の指導に対する項目も加えて、全員に配備されたタブレットを用いて授業評価を行い、各教科の授業改善に反映させています。

市内の小学校ではＢ小学校が、低学年用、高学年用の項目で授業評価を行っています。Ｂ小学校は全国学力・学習状況調査で昨年に続き今年も全国平均を大きく上回る成果をあげています。児童生徒、保護者、職員による学校評価に加え、市内のいくつかの小中学校で児童生徒による授業評価が行われるようになってきました。

今後更に、本市の小中学校では、児童生徒の姿や地域の現状等に関する調査や各種データなどをもとに、教育課程を編成し実施していきたいと思います。そして、各校で取組の適切さについて評価して教育活動等の改善に生かし、ＰＤＣＡサイクルを確立して、Ａ中学校のような生徒を主役にした活力ある学校づくりに取り組んでいきたいと思います。

［集中して授業に取り組む中学生］

６　市内小中学校の今後の取組

Ａ中学校では、生徒を主役にして「生徒と先生で創り出す授業」の考えのもと、「学びのスタンダード」を生徒と先生で共有し、日々の授業づくりに取り組んでいます。また、多様な生徒たちに丁寧に向き合い、個に応じた支援をタブレットなども積極的に活用しながら行っています。そして、学校での取組の適切さについて学校評価や授業評価を実施し、ＰＤＣＡサイクルを確立して、教育課程の編成や授業改善に取り組むことにより、安定した学力をつけています。このＡ中学校の実践に学びながら、本市の「一人ひとりの育ちに、ていねいに向き合う教育」を基本理念として、次のことを大切にした取組みを進めていきたいと考えます。

⑴　塩尻市の重点施策を活かした生活の基盤づくり

塩尻市が推進している「早ね 早おき 朝ごはん・どくしょ」の市民運動に基づく様々な取組みが行われ、市内の子どもたちに規則正しい生活や読書の習慣が身につき、そのことが安定した学力の定着につながっています。今後も子どもたちが、家族の一員として家庭での役割を果たしながら、バランスよく学習や読書、運動や遊びを行う中で、社会的自立に向けた生活ができるように、保護者と協力して家庭生活の充実に取り組んでいきます。

⑵　多様な学びに応える不登校対応と「元気っ子応援事業」を核にした個に応じた支援

明るく楽しい学校・学級づくりを進めるとともに、子どもや保護者の声に耳を傾け、関係機関とも連携して、チームで多様な学びに応える不登校対応を進めていきます。

また、一人一人の育ちを応援していく「元気っ子応援事業」を今後も推進し、引き続き、子どもたちの個性や特性に応じた指導の工夫に取り組んでいきます。自尊感情を育み、子どもたちの育ちに丁寧に向き合いながら、チーム支援体制の改善を図り、個に応じた支援の更なる質の向上を目指します。

［タブレットを用いた小学校の授業］

⑶　教員の指導力向上と授業改善

ア　Ａ中学校の取組で紹介したように、授業のはじめに「学習問題・学習課題をつかみ、目標をもつ」活動や、授業のおわりに「ポイントに沿って振り返る」活動をきちんと位置づけるなど、子どもたちが主体的に学べる授業スタイルを定着させます。また、一人一人に配備したタブレットを効果的に利活用する授業を進め、個別最適な学びと協働的な学びを開し、どの教室でも、これからの時代を生きていくための力が身につくように、授業改善に取り組みます。

イ　教科学習をはじめとした教育活動の中で「自分たちで課題を見つけ、その解決に向けて情報を集め、学級やグループで話し合いながらまとめ、記述し発表する」などの学習を通して、「知識・技能」「思考・判断・表現」の力をバランスよくつけていきます。また、子どもの学びのプロセスに沿った授業展開を考え、「人・もの・こと」との関わりを大切にした体験的活動を充実させます。

ウ　学力向上のために、少人数学習やチームティーチング、小学校の教科担任制など効果的な指導法について研究をしていきます。

(4) 地域の人的・物的資源を生かした教育活動の充実

コロナにより中止していた、コミュニティ・スクールを生かした教育活動が再開されてきています。学校支援コーディネーターとの連携を密にし、子どもたちが自ら課題を見つけ、自ら解決する力を身につけるため、「体験的な活動」や、自らの将来を考える「キャリア教育」を更に充実させていきます。地域の方の協力を得ながら、地域の人的・物的環境を生かした教育活動を展開していきます。

(5) 小中連携と９年間を見通した指導内容・方法の研究

楢川小中学校が義務教育学校として本年度４月から小中一貫教育をスタートさせました。また、英語教育では、３年前から小学校の５・６年に外国語、３・４年に外国語活動が位置づき、１・２年も本市独自で外国語に触れる活動をしています。本年度本市では小学校１年から中学３年までを見通した「塩尻市英語教育グランドデザイン」を策定しました。他の教科指導や生徒指導においても、中学校区ごとに小中連携を図り、各校の教育目標を共有しながら、児童生徒理解を深め、９年間の系統的な指導内容・方法についての研究を進めて、一貫性のある教育の推進に努めていきます。